

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 経済表の省略化と其範式   |
| Sub Title        |   |
| Author           | 渡辺, 建   |
| Publisher        | 慶應義塾経済学部研究室   |
| Publication year | 1944  |
| Jtitle           | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.38, No.8 (1944. 8) ,p.573(27)- 619(73)  |
| JaLC DOI         | 10.14991/001.19440801-0027  |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19440801-0027">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19440801-0027</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウィクセルは個人又は營利資本と社會又は生産資本の區別を無用であると考へる。何となれば社會資本は個人資本の合計に過ぎないからである。ウィクセルによれば、スミスやボームによつて個人資本ではあるが社會資本ではないとされた貸住宅、貸衣服及び貸本等も社會資本の一部である。何故ならこれらは財の生産に使用されることはいけりども、なほ社會福祉の維持に用ひられるからである(註3)。このやうな概念は、スミスの社會資本を一層廣義に解してのみ成立し得る。然し社會福祉の維持に用ひられるといふ點で、二つの資本概念を結合することが、資本本質の明瞭化に如何程役立つかは疑問である。

このやうに營利資本と生産資本を一つの概念に統合しようとする企圖があるけれども、統制経済における資本の本質はかゝる方法によつては明らかにされないであらう。統制経済下の資本とは營利性と國家性の一致を目指して生産を支配する貨幣價值量である。かゝる本質觀に立つて、資本理論は出發しなければならぬ。

(註1) 高田保馬博士「經濟學新講」第二卷一六一—二頁參照

(註2) Böhm-Bawerk, Positive Theorie des Kapitals, Ss. 29—30. Karl Knies, Das Geld, first ed. p. 47.

(註3) Wicksell, a. a. o. Ss. 71—81. 邦譯一九九—一三四頁

## 經濟表の省略化と其範式

### 渡邊 建

經濟表は地主の所得四百リールを基本とするケネエ手記のものより、其所得六百リールを基本とする經濟表第二、第三版の表、及びミラボオ侯「經濟表と其解説」の第一表、次いで其所得一千五十リールを基本とする其第二表、更に又「農業哲學」並に「農業哲學綱要」に挿入せらるる地主階級の所得二千リールを基本とする大表に至るまで、それは何れも佛蘭西の農業のそれ々の再建狀態下に於ける國家社會の經濟の基本的秩序を表式したものである。

然しながらこの經濟表の原表は其機構が餘りにも複雑であるが故に「農業哲學」の中には、原表を省略せる機構をもつ表式を使用して經濟上の諸問題の解答を求めてゐる。(Philosophie rurale, p. 216, p. 217; t. II, p. 176, p. 200.) 今原表との關係を明かならしむる爲に、佛蘭西の農業が最高限度に發達せる時の地主階級の所得二千リールを基本とする社會各階級の支出秩序をこの「省略せられたる原表」の機構にて示せば本稿の第二圖の如くなる。これを「農業哲學」並に「農業哲學綱要」に挿入せられたる經濟表原表(本稿第一圖)と比較すれば生産・不生産兩階級の相互的賣買過程の第二回以下が省略せられたるものであることが直ちに了解し得る。

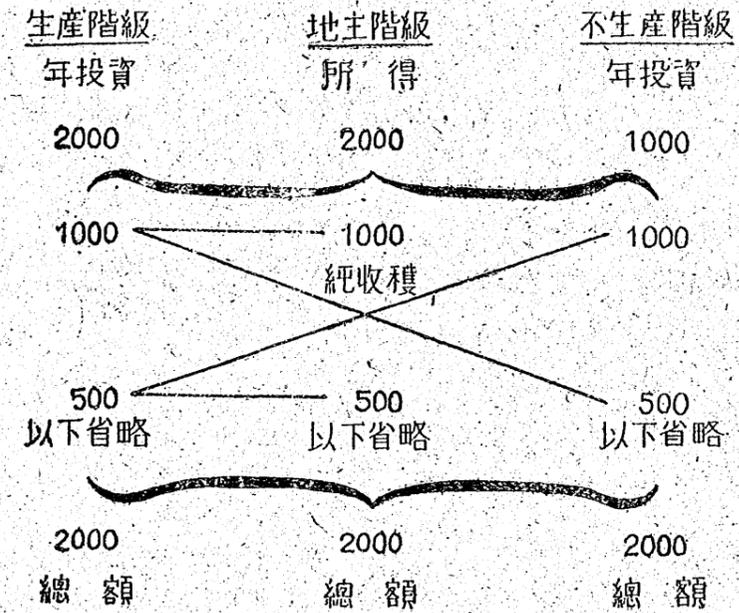
而も亦『農業哲學』に於ては、挿入する經濟表原表の生産・不生産兩階級相互の漸減的賣買過程を括約せる機構（本稿第三圖）を以て「經濟表」に示められたる分配の諸結果の概括」*Precis des Resultats de la Distribution* (*Philosophie rurale*, p. 44, p. 116 : t. I. p. 122, p. 327) を考察する。斯くの如き機構を有する表式を『農業哲學』に於て「概括小表」*Petits Tableau précis* (*Philosophie rurale*, t. I. p. XLV) 又は「略表」*Tableau abrégé* (*Philosophie rurale*, t. II. p. 169, p. 179) と稱して又經濟上の諸問題を解決することも使用してゐるが、これはネエの『經濟表の分析』の範式 *Formule du Tableau Economique* (*Physiocratie*, t. I. p. 65 : *Œuvres*, par Orcken, p. 316. 本稿第六圖) やミラボオ侯の『農業哲學綱要』の略式 *Formule abrégé du Tableau Economique* (*Elémens de la Philosophie rurale* p. 74) とは機構上根本的差異あるものである。故に本稿に於ては、經濟表は其機構に於て原表（省略せられたる原表を含めて）と略表と範式（略式を含めて）の三種あるものと做す。（『三田學會雜誌』第三十八卷第二號八五頁參照）

この經濟表略表の機構に在りては、地主階級より生産・不生産兩階級が受理する一千リールとこの兩階級が相互に受け取る一千リールとを點線にて結ぶが故に、生産或は不生産階級は農産物又は製作品の賣却代金として、地主階級より受け取る金額を、其儘直ちに相互に支出する如くに見ゆるも、原表の漸減的支出の過程が括約せられたるものと考ふれば、生産階級が不生産階級に支出する一千リールは該階級が地主並に不生産階級より農産物の代金として受け取る二千リールの貨幣の一半であり、又不生産階級が生産階級に支出する一千リールは、地主・生産兩階級に賣却せる製作品の代金二千リールの中より生活のための農産物を購入するために、生産階級に支出

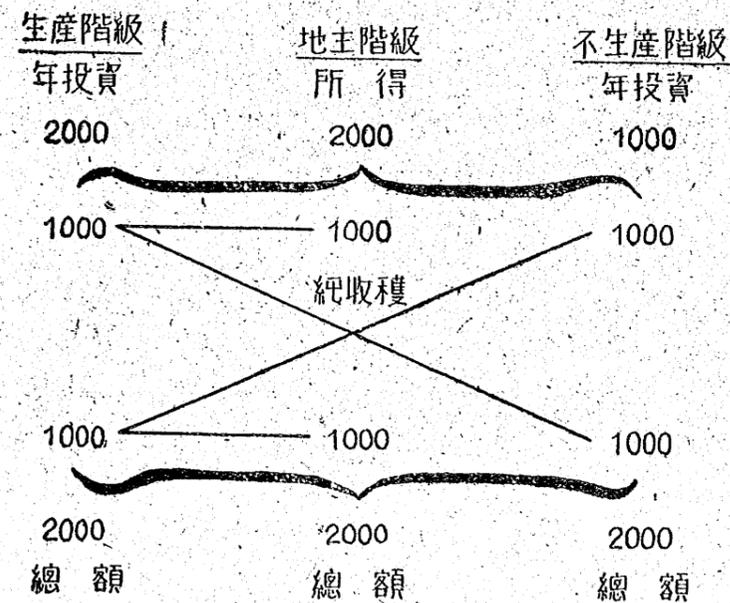
第一圖  
「經濟表原表」

| 生産階級       | 地主階級       | 不生産階級      |
|------------|------------|------------|
| 年投資        | 所得         | 年投資        |
| 2000       | 2000       | 1000       |
| 農産物        | 純收穫        | 製作品        |
| 1000       | 1000       | 1000       |
| 500        | 500        | 500        |
| 250        | 250        | 250        |
| 125        | 125        | 125        |
| 62-10      | 62-10      | 62-10      |
| 31-5       | 31-5       | 31-5       |
| 15-12-6    | 15-12-6    | 15-12-6    |
| 7-16-3     | 7-16-3     | 7-16-3     |
| 3-18-2     | 3-18-2     | 3-18-2     |
| 1-19-1     | 1-19-1     | 1-19-1     |
| 0-19-6     | 0-19-6     | 0-19-6     |
| 0-9-9      | 0-9-9      | 0-9-9      |
| 0-5-0      | 0-5-0      | 0-5-0      |
| 0-2-6      | 0-2-6      | 0-2-6      |
| 0-1-3      | 0-1-3      | 0-1-3      |
| 0-0-8      | 0-0-8      | 0-0-8      |
| 2000<br>總額 | 2000<br>總額 | 2000<br>總額 |

第二圖「省略セラレタル原表」



第三圖「經濟表略表」



せる金額である。従つてそれは略表に註記せらるゝ如く、生産・不生産階級が相互に他の階級より支拂はれた貨幣額であつて、この兩階級が地主階級より受け取る金額に直接には關係なきものである。要するに略表の生産・不生産階級を相互に結ぶ點線は、地主階級に賣却せる農産物及び製作品の代金を直ちに相互に支出することを意味するに非ずして、單に相ひ互に支拂ふ貨幣總額を表示せるものである。而もこれは、經濟表の原表並に略表に示められたる範圍に於ける兩階級間相互の支出總額であつて、既に原表の解説(『三田學會雜誌』第三十八卷第三・四合併號一一頁参照)にて注意せる如く不生産階級より生産階級への支出は、更に前者が保有せる本年度の年投資としての貨幣一千リールの生産階級への支出が加へらるべきである。

而も、この略表の附記 (Philosophie rurale, p. 44, p. 116 : t. I, p. 123, p. 327) に據れば吾々は次の事項を了解し得る。

第一に、表に於ては不生産階級の年投資として留保せられたる貨幣一千リールが製作品の原料とする農産物を購入するために生産階級に支出せらるゝこと。

第二に、斯くて表に於て地主階級に一千リール、不生産階級に一千リールと前年度の農産物の純收穫二千リールを賣却せる生産階級は、更に前年度の投資の利子の回收として保有せる農産物一千リールを不生産階級に製作品の原料として賣却すること。

第三に、表に於ては投資の利子を考慮せずして、年々四千リールズの農産物を再生産するものとせる生産階級は、投資の利子を計算に入れば、その回收分を含めて五千リールズの農産物を再生産することとなり、其内三千リールズは、地主階級に一千リールズ、不生産階級に二千リールズ賣却され、其年投資の回收として生産階級に先取得されたる二千リールズは農業經營者によりて一千リールズ、農業労働者によりて一千リールズ、其生活のために消費せらるること。

従つて經濟表の原表並に略表に在りては別に考慮するものとせる農業の投資の利子を計算に入れて農産物再生産總額を五千リールズとなし、次いで原表並に略表にては不生産階級に保有せらるるものとせる其年投資一千リールズが製作品の原料とする農産物購入のために生産階級に支出せられるものとし、更に生産階級内の農産物消費額二千リールズを略表に記入して、三階級間のすべての賣買過程と再生産せられた凡べての農産物の消費状態とを表式すれば、略表は次の第五圖の如く補足せらるることとなる。

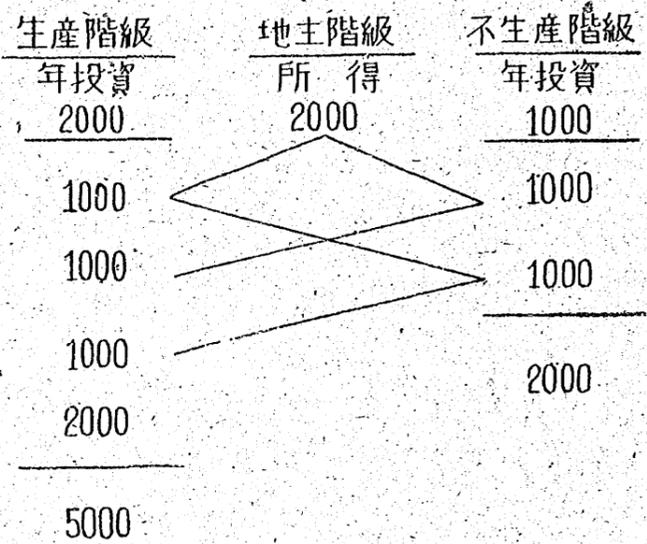
又經濟表原表(本稿第一圖)に於て、不生産階級に保有せらるるものとせる其年投資一千リールズが生産階級に支出さるる過程を考慮すれば、製作品の賣却代金の總額二千リールズが生産階級に支出せらるることとなり、斯くて生産階級は地主階級に一千リールズ、不生産階級に二千リールズ、合計三千リールズの農産物を賣却することとなるが、經濟表に在りては食料として賣却せる農産物の代金二千リールズのみが其年投資として使用せられて十割の純收穫を再生産するのである。この三階級間の凡べての支出過程を原表の形式にて強いて表示すれば、本稿第四

第四圖「補足レタル原表」

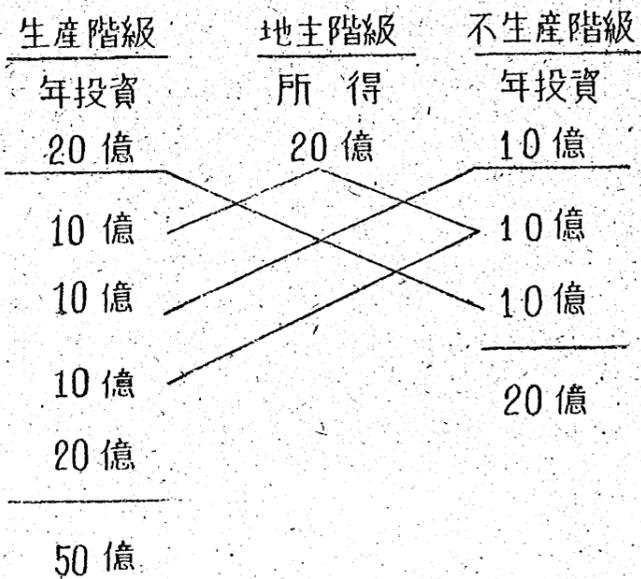
| 生産階級    | 地主階級    | 不生産階級   |
|---------|---------|---------|
| 年投資     | 所得      | 年投資     |
| 2000    | 2000    | 1000    |
| 農産物     | 純收穫     | 製作品     |
| 1000    | 1000    | 1000    |
| 1000    | 500     | 500     |
| 500     | 250     | 250     |
| 250     | 125     | 125     |
| 125     | 62-10   | 62-10   |
| 62-10   | 31-5    | 31-5    |
| 31-5    | 15-12-6 | 15-12-6 |
| 15-12-6 | 7-16-3  | 7-16-3  |
| 7-16-3  | 3-18-2  | 3-18-2  |
| 3-18-2  | 1-19-1  | 1-19-1  |
| 1-19-1  | 0-19-6  | 0-19-6  |
| 0-19-6  | 0-9-9   | 0-9-9   |
| 0-9-9   | 0-5-0   | 0-5-0   |
| 0-5-0   | 0-2-6   | 0-2-6   |
| 0-2-6   | 0-1-3   | 0-1-3   |
| 0-1-3   | 0-0-8   | 0-0-8   |
| 3000    | 2000    | 2000    |
|         | 總額      | 總額      |

圖の如き「補足せられたる原表」となるが、この中央の純收穫を除き、生産階級の第三段以下、不生産階級の第二段以下を括約し、それに生産階級の農産物消費額を附記すれば又前記の「補足せられたる略表」(本稿第五圖)となるのである。(尙「補足せられたる原表」に就ては『三田學會雜誌』第三十八卷第三・四合併號一一一一―一二三頁参照)

第五圖「補足せられたる略表」



第六圖「經濟表範式」



而もこれは、ケネエの手記せる經濟表と、彼自身出版せる經濟表第二版本等を發見せるパウエル Stephan Bauer が英國經濟協會の需めによりて、一八九五年三月發行の Economic Journal 第五卷に寄稿せる其「ケネエの經濟表」 Quesnay's Tableau Economique, with Unpublished Letters 中に範式の解説のために其「解釋を抄略せんがためにケネエの配列とは相異なる」(同誌一六頁註)ものとして掲げたる所謂「パウエルの略表」(同誌一七頁)と其機構を一つにするものである。而してパウエルの略表も結局はケネエの『經濟表の分析』の要約の論述に據るものである。

故に『農業哲學』に記載せらるる略表(ミラボオの略表)を其附記に據りて補足せる本稿の第五圖「補足せられたる略表」はケネエが『經濟表の分析』の要約に記述せる流通過程を表式せるものに外ならぬ。

II

ケネエの『經濟表の分析』Analyse du Tableau Economique は、最初一七六六年『農商財政雜誌』Journal de l'Agriculture, du Commerce et des Finances 六月號に掲載せられたもので、マドボン Dupont de Nemours は其『摘要』Notice abrégée des différents écrits modernes qui ont concouru en France à former la science de l'économie politique の一七六六年六月の項に「經濟表の發明者自身によりて與へられたるこの解説は一圖表 une figure が加へられ、四十頁にも増補がなされて『フィジオクラシー』Physiocratie に採録せられた。それは簡潔なるが故に理解に最も容易であると考へられる」。(Œuvres de F. Quesnay, par Oudren, p. 308 note)と記述して居るが論集『フィジオクラシー』に輯録せられた『經濟表の分析』の説明も、其要約に挿入せられたこの圖表即ち經濟表範式を充分解説するものではないといふ非難がその當時既に起り、ポオドオ Abbé Baudeau は師ケネエの許可を得、其校

閣の下に、其前提條件を幾分變更し、三階級間の流通過程を三段階に分解して、新たに經濟表の解説表式を描いたのである。(Physiocrates, par Daire, t. II, p. 865-6) 又其他の門弟も多く著述によりてそれを解説せんと試みた。然しながら斯くの如き彼等の努力にも拘らず「それは資本の全生産過程を再生産過程として叙述し、流通をたゞこの再生産過程の形態として、貨幣流通をたゞ資本の流通の一契機として叙述する試みであり、同時にこの再生産過程の中に収入の發源を—資本と収入の交換を—再生産的消費の決定的消費に對する關係を—更に又、資本の流通の中に消費者と生産者との間、即ち事實上資本と収入との間の流通を—包括せしめんとする試みであり、最後にこの再生産過程の契機として生産的労働の二大部分間の流通即ち原産業と製造工業との流通關係を叙述せんとする試みであり、これ等の總てを六つの出發點と歸着點とを結ぶ五つの線から成る表の中に表示せんとする經濟學の搖籃期、十八世紀の最初の三分の一の時代に、それは疑ひもなく最も天才的な思附であつた」と賞讃するまで久しく何人にも顧みらるゝことなく又理解せらるゝことがなかつたのである。

ケネエの經濟表の發見者たる名譽を擔へるバウエル Stephan Bauer は、一八九五年三月發行の Economic Journal 第五卷に寄稿せる『ケネエの經濟表』 Quesnay's Tableau Economique, with Unpublished Letters 2「解説を抄略するがためにケネエの配列と相異なる」(同誌一六頁註)所謂「バウエルの略表」を掲げて(同誌一七頁)範式の流通過程を説明した。(但し同誌掲載の圖表中不生産階級の受取額を五十億とせるは二十億の誤りである。)

而してこの「バウエルの略表」も其説明も、前述の如く結局はケネエが『經濟表の分析』の要約に論述する處を説明し、又之を表式化したものに外ならぬ。而もそれは又『農業哲學』に記載の經濟表の略表に、其附記に述べら

れたる三階級間の凡べての流通並に消費の過程を描き添へたる本稿の第五圖「補足せられたる略表」に一致するものである。

ヘネイ Lewis H. Haney は其『經濟思想史』 History of Economic Thought (Revised edition, 1922, p. 176) 2この「バウエルの略表」に經濟表の原表の如く中央に純收穫を記入せる圖表によりて經濟表を紹介してゐる。

又吾が國に於ては、大正七年十月、三邊金藏教授はケネエの『經濟表の分析』の本文の説明を忠實に描き出す時は、其要約中の範式とは相異なる機構の一表式を得ることを指摘せられた。(『三田學會雜誌』第十二卷第十、第十一號掲載「經濟表 Tableau Economique の解説」)この論稿は福田徳三博士が「經濟表に關する有益な論文」—其『經濟學全集』第五卷上四七三頁—とせられ又、小泉信三博士よりも「後學を益すること極めて大なり」—『三田學會雜誌』第十七卷第八號一〇頁—と賞讃せらるゝものであるが、それは更に大正十三年岩波書店發行の『經濟學說研究』にケネエ死後百五十年の記念として加筆再録せらる。三邊教授の解説表式は同學會雜誌第十二卷第十一號五十頁、『經濟學說研究』三四七頁に記載せらる。尙同教授は「範式に誤りあり」とするこの論稿の斷定を大正十五年四月の『三田學會雜誌』第二十卷第四號の「ケネー經濟表の範式に就て」と題する論稿に於て自ら修正せられた。

更に増井幸雄博士は其著『ケネー』(三省堂發行—社會科學の建設者、人と學說叢書)に「ケネーの範式とは更に數個の點で異なる」表式—三邊教授の解説表式と同一の機構の表式—を以つて範式の説明をせられた。(同書一七三頁参照)

又久保田明光教授は『經濟表の分析』の本文の説明を表式化する三邊教授の解説表式と同一のものと、其要約を表式化するパウエルPaulの略表と同じものとの二種の表式を掲げてケネエの範式の説明を行はれた。(同教授『經濟學史講義案』上巻一八二—三頁及び同教授『フイジオクラシー』新經濟學全集第五卷五二—三頁挿入圖參照)

而して大野信三教授の『經濟學史』(昭和十六年八月發行)に在りては『經濟表の分析』の本文を表式化する圖表を挿入して「主として三邊金藏教授の解説に據る」と註記せられる。(同書一四三頁)

既に福田徳三博士は「ケネーの作つた此略表(本稿の範式)は少し込み入つて居つて(或人は其れは間違である)と斷定して居りますが其れは中つて居りません、唯だ込み入つて居るのであります。」(『經濟學原理流通篇』上改造社版—經濟學全集第三卷一—三頁)此の略表(本稿の範式)は其れ丈けでは殆んど分り兼ねるものであります。原表に就て粗要領を會得した後には、略表(本稿の範式)は参考にはなりますが、原表を知らずして略表(本稿の範式)計りを見たのでは何が何やら分らないのであります。殊にパウアーPauley氏が修正を試みる必要を感じた通り、略表(本稿の範式)線の引き方が間違つて居るとは申されませんが甚だ分り憎いのであります。マルクスはそれを修正も何もせず其の儘に取扱つて居ります。従つてマルクスの論述其のものを見ても一向要領を得ることが出来ないであります(同書一〇〇頁)として、マルクスの解説に不満を表明しパウエルの修正を是認し「其の方が分り易くありますから」(同書一一三頁)とてパウエルの略表によりて經濟表を説明せられた。

又舞出長五郎教授は「經濟表範式には疑問あり、筆者は年來此範式により其示さんとする富の流通を釋かんとして果さず、よつて一層簡明に書き改めたるものとして、ステファン・パウエルの掲ぐる別表(本稿の「パウエルの

略表)をば使用して居るのである」(同教授「フランス・ケネーと經濟學」昭和四年、山崎教授還曆祝賀記念論集『經濟學研究』經濟篇二二七頁)とせられ、其『經濟學史概要』上巻にも「パウエルの略表」を範式と共に掲げて(同書七五頁)ケネエの「經濟表範式は前述の彼自身の説明とは一致しない。そこでステファン・パウエルは、これを書きかへてゐる」と註を附せられ、範式の説明は主としてパウエルの論稿「ケネエの經濟表」に據られる。(同書七八頁、註3註4參照)

昭和十八年三月刊行された關未代策博士の「東洋思想と佛蘭西經濟學」に在りても「左に(同書三一五頁)に掲げたる上部はケネーの作つた略表(本稿の範式)であるが、多少込みいつてゐて了解し苦いので、下部に示したステファン・パウエル教授の使用したる修正表に従つて説明しようと思ふ」(同書三一四頁)とせられた。

而して山口正太郎博士は範式の機構の儘、其解説を試みられたものではあるが、範式にて生産階級の消費するものとせる二十億(フラン)の農産物を純收入二十億(フラン)と改めて、地主階級の所得となるべきものとせられた。而もこの表を以つてしても、純收穫が貨幣に交換さるゝ過程は、遂に表示し得ないといふ不満を自ら表明せられたのであつた。(『經濟表の研究』—大阪商科大学經濟研究年報』第四號一〇七頁參照)

更に田中忠夫教授は其『經濟思想史概説』(昭和四年二月發行)に經濟表中の循環論を説明して範式をいさゝか改めた解説圖を掲げて居り(同書六四頁)それはその儘、戸田武雄氏の「財政」(昭和十八年三月發行)の中に利用されてゐるが(同書六四頁)その圖は生産階級の年投資が不生産階級に支出さるゝことを明らかにせず、又その流通には三十億フランの貨幣を要する點に於て又吾々を満足せしむるものではないのである。

又現代の國民經濟の全機能と其複雑なる經濟循環を解明せんとして其基本圖式を描ける越村信三郎教授は、其「經濟循環の基本圖式」(昭和十七年六月發行)に於て「經濟循環の圖式として古來有名なケネーの經濟表」(同書緒言一頁)としてその簡式を掲載し、(同書一六頁)其解説圖表を同書一七頁に記載する。而してそれは、簡式の機構のまゝにて三階級間の流通を説明せらるゝのであるが「これらの生産物の流通を媒介する貨幣は經濟表の出發點に於いて、いかに三階級に配分されてゐるか。まづ生産的階級の手許には、前年度の年前拂の回收分として2(二十億)の貨幣があり、つぎに、土地所有者の手許には、前年度に於て生産的階級より地代等として徴收した貨幣收入(二十億)あり、さらに不生産階級の手許には、前年度の年前拂回收分として1(十億)の貨幣が存在する。これらの貨幣が今年度の生産物流通の媒介手段として、再び其機能を開始するのである」(同書一八頁)とせられた。斯く經濟表の簡式の流通を貨幣五十億(フラン)を以つて説明するは後に詳述する如く、ケネーが地主階級の所得額に等しき貨幣量二十億(フラン)を以つて十分なりとするに一致せざるが故に、吾々の承認し得ざる處である。

斯くの如くケネーが「經濟表の分析」にて説かんとせる三階級間の流通過程は、其要約中に掲げられた簡式と機構を異にする「經濟表の分析」の本分を表式化する解説表式—三邊・増井・久保田三博士の解説表式—に據るか、或は「經濟表の分析」の要約を表式化する解説表式—「パウエルの略表」即ち本稿の「補足せられたる略表」に一致する解説表式—に據るか、從來そのいづれかに據りて解釋せられたるものと言ひ得らるゝのである。従つて簡式が表明する三階級の流通過程は、本質的にはこれ等の機構を異にする表式によりて説明し得たとするも、簡式の機構そのものに就ては、嚴格に言へば解説せらるゝことがなかつたと言はねばならない。故に本稿に於ては、ケネーの

『經濟表の分析』の説明を、經濟表第二版の『經濟表の説明』と比較検討しつゝ、更に『農業哲學』の「ミラボオの略表」(本稿第四圖)と、之を其附記に據りて補ひたる本稿の第三圖の「補足せられたる略表」即ち「パウエルの略表」とを参照しつゝ、簡式の機構(本稿の第六圖)の成立過程を考察し其解釋を試みんとす。

三

『經濟表の分析』に在りては、先づ國家「三階級間の關係を明瞭に追及計算するには、何か或る具體の場合に依らなければならぬ。單なる抽象に基いて實證的計算をなすことはできぬからである」(Physiocratie, t. I, p. 46: CEuvres, p. 309: 岩波文庫『經濟表』四六頁)と做すが、其前提とせる具體的狀態は「一億三千万アルバンの領土を有する國即ち、セザール・フランソワ・カッシニ・ツ・テュリ César-François Cassini de Thury によりて描かれた佛蘭西王國に於て、廣義の農業全般に百億フランの原投資と年投資二十億フランが投下せられ、其可耕地六千萬アルバンに全般的に大規模耕作が實施せられ、而も其生産せらるゝ農産物の最初の賣手の價格が取引の完全なる自由の結果いづれも良價、例へば小麦一セチェ十八リヴルの如くに維持せられ、更に又農業經營者は、直接にも間接にも、何等課税せらるゝことなく租税が全く土地よりの収入、即ち地主階級の所得のうちのみ直接課せらるゝといふ二つの不可缺の條件の下に、その農産物の總額が五十億フランとなり、従つて其年支出としての年投資二十億フランと投資の利子十億フランの合計三十億フランを回收しても、尙年投資額の十割の二十億フランの純収益を生ずる如き佛蘭西の農業が最高限度に發達せる状態である。斯くて各階級の支出の基本となる地主階級の所得總額は二十億フランとなるのである」(『三田學會雜誌』第三十八卷第一號七五頁參照)

經濟表原表に在りては、この地主階級の所得とこれを齎すべき純收穫を生ずるに要した生産階級の年投資とを點線にて結ぶが故に、生産階級の農業經營者が地主階級に其所得となるべき貨幣を納付するを第一過程とした。而して範式の解説を試みたるポオドオの解説表式に在りても、地主階級の所得が生産階級より納付される過程を表式して居り、又流通の初めに於て生産階級が二十億フランの貨幣を有するものと解するものもあるが、兎に角それは小作料其他として先づ地主階級に納付せらるゝのである。然しながら範式にてはこの過程を表示して居ないが故に、本稿に在りては地主階級が所得としての二十億フランの貨幣を既に生産階級より納付せられて所有し居るものとしてその解説を始むることとする。

尙この範式に於ける地主階級の所得二十億フランをシュバン及び山口正太郎博士は農産物と解するも本稿に在りては經濟表原表の解説に於て論ぜらる如く貨幣とする。(『三田學會雜誌』第三十八卷第三・四合併號九三—九七頁參照)

(一) 範式の第一過程と其結果

地主階級はこの所得二十億フランの貨幣を折半して、十億フランを農産物購入の爲に生産階級に、十億フランを製作品購入の爲に不生産階級に支出するものとす。(Physiocratie, t. I. 48: Œuvres, p. 310: 岩波文庫『經濟表』四七頁)

斯くの如く地主階級及び其他の階級が取得する貨幣を生産・不生産兩階級に折半に支出することが年々同額の農産物を再生産し得る根本的不可缺の條件であつて、而もこの所得の半分を不生産階級に支出し得るのは範式が前提

とする如く農業が最高限度に達し、又取引の自由及び便宜が最高極度に達して、地主の収入が最早増加し得ざる如き一國繁榮の状態に於てのみ許さるべきことであつて、それ以前に於ける不生産階級への餘分の支出は、各個人並に國家の繁榮に有害なる奢侈的支出であるとする。(『重要考察』第三考察—Physiocratie, t. I. p. 72: Œuvres, p. 318: 岩波文庫『經濟表』六一頁)

而してこの第一過程に先立つて、當然生産階級は十億フランの農産物を、不生産階級は十億フランの製作品を、所有してゐたものと考へねばならぬ。従つてこの第一過程の結果、この農産物と製作品とは貨幣に置き替へられ、一方地主階級は所得としての貨幣二十億フランを生活資料としての農産物十億フランと製作品十億フランとに替へて一ヶ年の生活を営むものである。斯くの如き各階級に生ずる財貨と貨幣との轉換を本稿の第七圖範式解説表式にて記入することとする。

(二) 範式の第二過程と其結果

次に不生産階級は其製作品の代價として、地主階級より受領せる貨幣十億フランをこの階級を構成する人々の生活に要する農産物十億フランを購入するために生産階級に支出するものとする。

『經濟表の分析』の本文の説明の順序に従へば不生産階級がその年投資十億フランを以つて製作品の原料としての農産物を購入する過程を次に述ぶることとなるが、斯の如き順序に従ふには、嘗つて試みられし如く、十億フランの貨幣を不生産階級が、金庫に有するものと想定せねばならぬ。而もこの本文の解説の順序に従つて忠實に表式すれば三邊教授が指摘せられし如く、範式と相異なる圖表を得ることとなる。且つ又既述の如く經濟表の原表並に略

表(ミラボオの略表)に在りては、この不生産階級の年投資は貨幣の形態にて最後まで保有せらるゝものとするが故に本稿に在りては、この不生産階級の年投資の生産階級への支出は最後に考察することとする。

更に又簡式に在りては、階級間の一ヶ年間の貨幣の授受を總括的に表示するが故に、不生産階級が生活のための農産物購入のために生産階級に支出する貨幣は、地主階級より受理する製作品の代金を之に充つるものとするも、經濟表原表が略表(ミラボオの略表)に總括せられし過程を考察すれば、不生産階級より生産階級へ支出せる貨幣額は該階級が地主並に生産階級に賣却せる製作品の代價として受け取る貨幣額の一半である。このことに就ては略表の機構の解説に於いて既に注意した。生産階級と不生産階級とを別々に考ふれば簡式に在りても斯く解説し得るも、各階級の一ヶ年間の貨幣の授受を總括して、之を循環的に説明せんとするには、前述の如く不生産階級は地主階級より受け取る製作品の代金を全額、生活のための農産物の購入のため生産階級に支出するものとせざるを得ないのである。

この過程の結果、不生産階級は製作品の賣却代金十億フランを以つて食料として一ヶ年間に消費する農産物を得、一方生産階級は所有してゐた農産物十億フランを貨幣十億フランに形態を變換したこととなる。

(三) 簡式の第三過程と其結果。

斯くして生産階級は所有してゐた前年度の純收穫としての農産物二十億フランを地主階級に十億フラン、不生産階級に十億フラン賣却して貨幣二十億フランを受け取ることとなつた。これは農業經營者の所有せる商品資本の貨

幣資本への形態變換に外ならぬものである。故に經濟表原表並に略表(ミラボオの略表)に在りては生産階級の農業經營者は他の二階級より農産物賣却代金として受け取る貨幣を前年度の年投資の回收とし、再び之を本年度の年投資として農業に投資するものとす。ケネエが經濟表第二版の「經濟表の説明」に記述するを引用すれば、地主階級の「所得の中經濟表の秩序に於て生産的支出に移つて行つた三百リールは其處へ貨幣で投資を齎らし、それが地主の所得の再生産の一部を成す所の純收穫三百リールを再生産する。而して所得總額は此同じ(生産)階級に歸來する金額の分配殘餘によりて、年々再産される」(Tableau Economique by F. Quesnay, p. II: 岩波文庫「經濟表」二〇頁―傍點は筆者)とし、又一ヶ年間の過程を總括して、生産階級の年投資六百リールは此の(生産)階級が地主と不生産階級とに對して行ふ賣却とによつて貨幣を以つてこの(生産)階級に齎せられる」(Tableau Economique by F. Quesnay, p. IV: 岩波文庫「經濟表」二二頁―傍點は筆者)と做す。

然るに「經濟表の分析」に在りては、最初に生産階級の年投資が「二十億(フラン)に達す」(Physiocratie, t. I, p. 48: Oeuvres, p. 30: 岩波文庫「經濟表」四七頁)と記するも、それが流通過程に於て如何に回收され、如何に支出さるゝか何等説明する處がなく、直ちに農産物の賣却代金「三十億(フラン)のうち二十億(フラン)は本年の收入として地主へ支拂はねばならぬ」(Physiocratie, t. I, p. 50: Oeuvres, p. 310: 岩波文庫「經濟表」四八頁)ものとす。故に「經濟表の分析」の説明は、生産階級の年投資に關する限り、少くも不充份であると言はざるを得ない。従つてこの本文の説明を表式化せる解説表式―三邊・増井・久保田三博士の示されし表式―に於て、生産階級の年投資より何れへも點線が引かれることなく、賣却代金が直接次年度に於て支出される地主階級の所得となるものと表示さるゝ結果となつたものである。

既に筆者は經濟表の原表を解説するに當りて、前年度の純收穫としての農産物を地主及び不生産階級に賣却せる生産階級の農業經營者、其代價として受領する貨幣を再び本年度の年投資として、其一半を不生産階級に支出して農具・其他の製作品を購入し、他の一半を生産階級内の農業労働者に賃銀として支拂ふこととした。(『三田學會雜誌』第三十八卷三・四合併號九九一〇四頁参照)

従つて經濟表の原表に在りては、地主及び不生産階級に賣却せる農産物の代金の一半が不生産階級に支出されるものとし、又略表の表式に在りては、原表の生産・不生産階級間相互の漸減的支出の過程を括約せる結果は、恰も生産階級は地主階級のみより受取る農産物の代金全額を不生産階級に支出するが如き觀を呈する結果となり、いづれも年投資の支出たることを表明し得なかつた。故に『經濟表の分析』の要約に挿入せる範式に於ては生産階級の年投資二十億フランの一半が製作品購入のために、不生産階級に支出されることを點線にて明示したのである。

斯くの如く地主及び不生産階級に其生活に要する農産物を夫々十億フランづゝ賣却せる生産階級は其代金として受領する二十億フランの貨幣を前年度の年投資の回收とするものであるから、本稿の解説表式に在りては、これを範式の上部に掲示する其年投資の位置に移動し、それが再び本年度の年投資となり、その一半十億フランが製作品の購入のために、不生産階級に支出されるものと矢標を以つて附記することとした。

この結果、生産階級の農業經營者は其年投資としての二十億フランの貨幣の一半を不生産階級に支出して十億フランの製作品を得、之を以つて農具其他の製作品の修復に使用し、他の一半を其雇傭する農業労働者の賃銀のために生産階級内に支拂ひて其労働力を獲得し得るものとする。斯くて一方、不生産階級は前年度の製作品十億フラン

を貨幣に變換したのである。

(四) 範式の第四過程と其結果

先きに、地主階級に十億フランの製作品を賣却せる不生産階級は、更に又生産階級に前年度の製作品十億フランを賣却することによりて再び十億フランの貨幣を受領した。斯くて不生産階級はこの貨幣十億フランを前年度に支出せる年投資十億フランの回收とし、再び之を本年度の年投資として留保するものとする。然しながら經濟表原表の漸減的過程が略表(ミラボオの略表)に一括せられし過程を考察すれば、不生産階級に年投資として保有せらるゝは該階級が地主並に生産階級に賣却せる製作品の代價として受け取る貨幣額の一半である。

生産階級と不生産階級とを別々に考察すれば、範式に在りても斯く解説し得るが、各階級の一年間の貨幣の授受を總括して表示し、而も之を循環的に説明せんとすれば、前記の如く不生産階級は生産階級より受け取る製作品の代金を全額前年度の年投資の回收とし、更に再び本年度の年投資として支出すべく保有するものとする。而して經濟表の原表及び略表(ミラボオの略表)にては不生産階級の年投資が斯く貨幣の形態にて保有せらるゝ状態にて其流通過程の表示を中止してゐるのである。

然しながら『農業哲學』の各階級諸支出の基本的秩序を示めず略表の附記 (Philosophie rurale, p. 44, p. 116 : T. I. p. 123, p. 327) に記述せらるゝ如く『經濟表の分析』に在りても、この不生産階級の年投資は製作品の原料とする農産物を購入するために生産階級に支出せらるゝものである。この一過程を加へることによりて、經濟表は三階級間の流通過程の全部を表式し得ることとなり、又斯くて生産階級は地主階級に本年度に於て納付すべき貨幣

額を所有し得、又不生産階級は翌年度に於て本年度と同様に他の二階級に賣却すべき製作品を製作し得ることとなるのである。故に本稿に在りてはこの過程を經濟表原表に加へて「補足せられたる原表」(本稿第三圖)を得、又「ミラボオの略表」に附加して、パウエルが「經濟表の分析」の要約を表式化して得た所謂「パウエルの略表」と同一機構を有する「補足せられたる略表」(本稿第五圖)を得たのである。

次に「經濟表の分析」の説明に在りても、範式に於ても生産階級の場合は年投資 *Avance annuelle* とするも、不生産階級に在りては單に諸投資 *Avances* と記す。従つて經濟表の誤謬の一つとして「生産的の者に於て固定資本 *Avances primitives* は流動資本 *Avances annuelles* の五倍の額と前提されてゐる。不生産的な者に於ては、この項目は少しも言及されない。而も無論、それは存在してゐることを妨げないのである」と指摘せられたが、これは經濟表諸表より考察して不生産階級の年投資であることは明かである。「農業哲學」の略表に在りては生産階級の年投資も單に諸投資と記載せらるゝのである。

而も、當時尙見るを得なかつた經濟表第二版の「經濟表の説明」に、ケネエは一國家の富を計算するに當りて、不生産階級の富として生産階級の年投資の半額に當る其年投資五億二千五百萬リールに次に「製作場の創設の爲め、道具・機械・水車・鍛冶工場、又は其の他の慣例的用途等の爲めに行つた此の階級の原投資二十億リール」(ibid; p. 11) 岩波文庫「經濟表」二七頁)と不生産階級の原投資を計上してゐる。然らば生産階級に於ては、其原投資百億フランの利子十億フランと計上するに、斯く不生産階級の原投資があるとすれば、その利子は如何に計算さるゝかと言ふに「農業哲學」に經濟表に於ては「不生産階級の原投資に就ては毫も計算する必要がない。此の階

級の企業者達は其製作品の賣却によりて、それを償ふことを知るからである。而も、此等製作品の賣却は經濟表の中に計算せられてゐる。」(Philosophie rurale, p. 32 : t. I, p. 91) これらの記述に據れば不生産階級にも原投資があり、其利子も考慮せらるゝも、それは不生産階級が他の二階級に製作品を二十億フランにて賣却することによりて回收せらるゝものと考へられる。

故に「經濟表の分析」に在りては、先づ「不生産階級の投資(正確には年投資)が十億フランであり、これは不生産階級によりて原料の買入の爲に生産階級へ支出せる」(Physiocratie, t. I, p. 48 : Oeuvres, p. 310 : 岩波文庫「經濟表」四七頁)とし、又「生産階級は……製作品の原料を買入れる不生産階級に十億フラン賣却する」(Physiocratie, t. I, p. 49 : Oeuvres, p. 310 : 岩波文庫「經濟表」四七頁)ものとする。

斯くて範式に在りては、原表及び略表に記載さるゝことなかつた不生産階級の年投資の生産階級への支出の過程が記入せらるゝこととなつた。而して本稿の「補足せられたる略表」並に「經濟表の分析」の要約を表式化する「パウエルの略表」の機構にありては、原表の生産・不生産兩階級間の漸減的過程が一括せられた結果、生産階級より受け取る製作品の代金が直ちに生産階級に再び支出せらるゝ如く表式せられる。

然しながら實際には不生産階級が他の二階級に賣却せる製作品の代價として受け取る二十億フランの中より回收せる前年度の年投資十億フランを、再び本年度の年投資として生産階級に支出するのである。故に範式に在りては不生産階級の年投資十億フランが生産階級に支出せらるゝものと點線にて表示するのである。而して範式の總括的に示された各階級の一年間の貨幣の授受を循環的に解説せんとする本稿の解説圖表に在りては、不生産階級が生

産階級より製作品の代金として受け取る貨幣十億フランが前年度の其年投資の回収として範式の上部に掲せらるゝ年投資の位置に移動し、それが本年度の年投資となりて、製作品の原料とする農業物購入のために生産階級に再び支出さるゝものと矢標を以つて附記することとした。この過程の結果、不生産階級の貨幣資本十億フランの生産資本化が行はれ、他方生産階級の農業經營者が投資の利子の回収として前年度の收穫より先づ取得し置きたる農産物十億フランは貨幣十億フランに形態變換せられたのである。

(五) 範式の第五過程と其結果

前記の四過程は何れも階級間の流通過程として範式に點線にて表示せらるゝも、この最後の過程は生産階級内の流通過程であるから範式には表示されてゐない。範式に在りては、「各階級の内部でのみ行はれる一切の流通は除外され、たゞ階級と階級との間の流通のみが顧慮される」ものであり、「流通はそれがたゞ各階級の階級圏の内部に於て行はるゝのみで階級相互間に行はれない限り經濟表からは除外されてゐる」のであると説くものもある『農業哲學』の「附記」に既に生産階級が二千リーヴルの農産物を消費するを明記して居り、従つて本稿の「補足せられたる略表」には之を記入したのである。而も又、この生産階級内の過程を考察しなければ範式に記載せらるゝ生産階級の年投資の回収として、保有せらるゝ農産物二十億フランの消費事情と、本年度の地主階級の所得二十億フランが如何にして農業經營者によりて納付せらるゝかを明かにするを得ない。生産階級の農業經營者は、既述の如く前年度の純收穫としての農産物二十億フランを地主及び不生産階級に賣却して得た貨幣二十億フランの一半を其雇傭する労働者に賃銀として支拂ふものとしたが、農業労働者はこの賃銀収入を以つて、農業經營者が年

投資の回収として所有する前年度の農産物二十億フランの一半を購入し、之を生活のために消費するものとす。而して其残りの農産物十億フランは農業經營者自身の一家が生活のために消費するものである。

この生産階級の農業經營者及び農業労働者が生活のために消費する農産物二十億フランは年投資の支出 *depense des avances annuelles* として範式に記入さる。

生活のために消費する農産物の代金として農業労働者より十億フランの貨幣を受理せる生産階級の農業經營者は、更に又、製作品の原料として賣却せる農産物の代價として不生産階級より十億フランの貨幣を受け取り、斯くてこの貨幣二十億フランは彼等より地主階級に納付せられる。而してこの七分ノ二、五億七千二百萬フランが租税として徴收せられ、七分ノ一、二億八千六百萬フランが十分ノ一税となり、七分ノ四、十一億四千四百萬（正確には十一億四千二百萬）フランが地主の純所得となるものである。

斯くして地主階級はこの所得二十億フランの貨幣を、次年度に於て本年と同様に支出し、従つて本年度と全く同一の流通過程が三階級間に反覆さるゝのである。

最後に範式に於ける貨幣循環の開始前と其の結果とを要約すれば次の如くなる。

生産階級の農業經營者は流通の開始前に、前年度の農産物五十億フランを所持せるも、其純收穫としての農産物二十億フランは地主階級の生活のために十億フラン、不生産階級の生活のために十億フラン賣却し、更に其投資の利子の回収として保有せる農産物十億フランは不生産階級の製作品の原料として賣却し、又其年投資の回収として留保せる農産物二十億フランは農業經營者が其生活のために十億フランを消費し、農業労働者の生活のために十億

フラン賣却する。其の間、二十億フランを投じて農産物五十億フランを再生産し、貨幣を二十億フランを地主階級に納付する。

地主階級は流通の開始前に前年度に生産階級の農業經營者より納付せられた二十億フランの貨幣を所得として所有し居るも、之を支出して生産階級より十億フランの農産物と、不生産階級より十億フランの製作品を購入して一ヶ年の生活をなし、更に其間再び二十億フランの貨幣を所得とする。

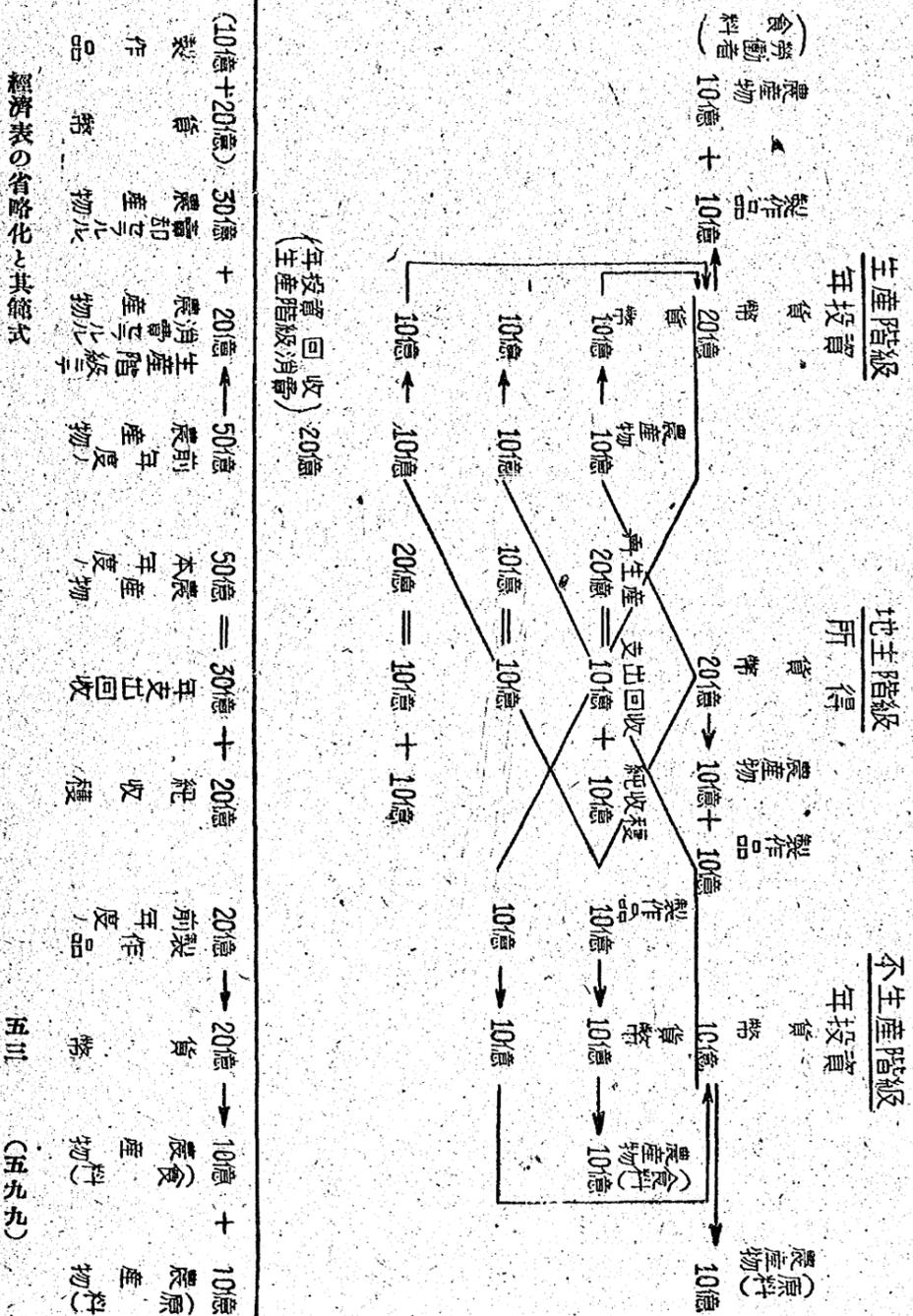
不生産階級は流通開始前、他の二階級に賣却すべき製作品二十億フランを所有せるも、之を地主階級に十億フラン、生産階級に十億フラン賣却し、其代金を以つて、十億フランの食料と十億フランの原料を購入して、再び製作品二十億フランを製作する。

斯くの如く『經濟表の分析』の説明を經濟表第二版の『經濟表の説明』を参照しつゝ補足することによりて範式の機構を解説したのであるが、其解説圖表を第七圖として次に掲ぐることとする。

四

前述する處に據りて農産物再生産總額と其消費を考察するに、經濟表原表並に略表(ミラボオの略表)に在りては、いづれも投資の利子を考慮せずして農産物の再生産總額を年投資の二十割、即ち年投資の回收と年投資の十割の純收穫との合計であるとした。然しながらケネエは農具其他の「日々の損耗を不斷に修復するために」又、或年には其年の收穫を殆んど全く破壊する如き霜害・雷害・黒穗病・洪水或は獸疫等の如き數多の大災厄に遭遇せる時の「豫備金」として、農業に投下せられたる資本が勞力と智能とをそれに結合する農業經營者に支拂はるゝ利子を、懶惰な利息生活者に支拂はるゝ利子と少くも同じ程度の一割とすることは至當であり、又、それが國家繁榮の「主

第七圖 經濟表範式解説圖表



經濟表の省略化と其範式

要條件」であると做して、投資の利子を計算すべきことを主張するが (Physiocratie, t. I, p. 56-60 : Oeuvres p. 33-4 : 岩波文庫『經濟表』五一―五三頁) 既に經濟表第二版挿入の第一の原表の下段に「農夫の原投資に對する利子三百リール」として、この回收分を含む農産物再生産額は年投資六百リールの二十五割、一千五百リールとなるものと附記し (岩波文庫『經濟表』一七頁) 又『農業哲學』の「ミラポオの略表」の附記に在りては、原投資並に年投資の利子を一千リールと計算し、これを回收する農産物再生産額は年投資二千リールの二十五割、五千リールと記述する。(Philosophie rurale, p. 116 : t. I, p. 123, p. 327) 而して『經濟表の分析』の説明にては廣義の農業全般の原投資總額を百億フランとして、投資の利子はその一割に當る十億フランであるとし、この投資の利子の回收分を含む農産物再生産額は年投資二十億フランの二十五割、五十億フランと算定し、これを範式の上部に記載する。斯くて年投資の利子は計算せざる様に考へらるゝが、ミラポオ侯の『經濟表と其解説』に在りては其經濟表原表の記入する數字は大規模耕作地百二十アルバンを耕作する馬の鋤半挺を基礎とするものであるとし、其鋤半挺分の原投資を五千リール、年投資を一千五百リールとし、投資の利子を原投資の利子五百リール、年投資の利子五百リールと算定する。又『農業哲學』に佛蘭西に於て穀物の輸出が自由となりて、農産物の價格が良價に維持せられ、更に又、農耕者の負擔となる間接税・夫役等が廢止せらるゝ時、耕作地の年投資は九億六千五百萬リールとなり、從つて其投資の利子は年投資の四倍の原投資の一割の利子三億八千六百萬リールと年投資の一割の利子九千六百萬リールとの合計四億八千二百萬リールとなるものとし (Philosophie rurale, p. 288 : t. II, 358) 又それより凡べての土地貸借契約が更新せらるゝ十年目には、年投資は十一億一千六百萬リール、原投資はその四倍の四十四億六千四百萬リールに増額せられ、從つて投資の利子は、原投資の

利子四億四千六百四十萬リールと年投資の利子一億二千六百六十萬リールとの合計五億五千八百萬リールとなると計算する。(Philosophie rurale, p. 293 : t. II, p. 372-3) これ等の計算より考察して、原投資を年投資の四倍とすれば、投資の利子として原投資の利子と年投資の利子とを計上し、又原投資を年投資の五倍とすれば、投資の利子は原投資の一割に當るものと記述するも、それは、年投資の利子も含むものと考へられる。『經濟表の分析』の説明にては原投資を年投資二十億フランの五倍、百億フランとし、單に投資の利子をその一割たる十億フランと做すが、これに附屬する『重要考察』の第四考察に「原投資の利子と年投資の利子の爲の十億があることを既に考察した (Physiocratie, t. I, p. 76 : Oeuvres, p. 320 : 岩波文庫『經濟表』六四頁) と記述する。而も之は『農業哲學』第七章の計算より推察すれば、純収益を生ずる農業の年投資二十億リールの四倍の原投資八十億リールの利子八億リールと年投資二十億リールの利子二億リールとの合計十億リールを廣義の農業の原投資百億リールの一割に當るものとせるものと考へられる。

次に、その投資と収益との關係を表示すれば次の如くなる。

|        |     |        |
|--------|-----|--------|
| 投資と収益  | 原投資 | 年投資    |
|        | 百億  | 二十億    |
| 投資の利子  | 十億  | 十億     |
| 原投資の利子 | 八億  | 八億 (1) |
| 年投資の利子 | 二億  |        |

經濟表の省略化と其格式

經濟表の省略化と其範式

|        |              |
|--------|--------------|
| 年支出    | 三十億          |
| 總收益    | 五十億          |
| 總年支出回收 | 三十億          |
| 總純收益   | 二十億          |
| 地主純所得  | 十二億四千二百萬 (2) |
| 地租     | 五億七千二百萬      |
| 十分の一稅  | 二億八千六百萬      |

“Philosophie rurale,” p. 138 : t. I. p. 385.

“Eléments de la Philosophie rurale,” p. 170-171.

“Physiocratie,” t. I. p. 46-48 ; “OEuvres,” p. 309-310.

註(1) 純收益ある農業の原投資八十億の一割の利子

註(2) 『經濟表の分析』に在りては、地主の純所得を正確に、十分の一稅の四倍、租稅の二倍として十一億四千四百萬フランとするも、斯くする時純收益合計は二十億二百萬フランとなるを以つて本稿にては、之を十一億四千二百萬フランと修正す。

次に生産階級は投資の利子十億フランを以つて、農具其他の修復のために製作品十億フランを購入使用するものとすれば、不生産階級は地主階級に十億フラン、生産階級に十億フラン合計二十億フランの製作品を他の二階級に賣却することとなる。而もそれは、十億フランの農産物を原料とし、其製作・販賣の期間に十億フランの農産物を生活のために消費して製作せるものである。斯くて農産物五十億フランの消費は次の如くなるものである。

| 消費狀態     | 農産物消費額  | 製作品使用額  | 消費總額     |
|----------|---------|---------|----------|
| 地主階級     | 十億      | 十億      | 二十億      |
| 地主階級     | 五億七千百萬  | 五億七千百萬  | 十一億四千二百萬 |
| 地主階級     | 二億八千六百萬 | 二億八千六百萬 | 五億七千二百萬  |
| 地主階級     | 一億四千三百萬 | 一億四千三百萬 | 二億八千六百萬  |
| 十分の一稅徵收者 | 二十億     | 十億      | 三十億      |
| 農業經營者    | 十億      | 十億      | 二十億      |
| 經營者      | 十億      | 十億      | 二十億      |
| 投資者      | 十億      | 十億      | 二十億      |
| 修復者      | 十億      | 十億      | 二十億      |
| 農業勞働者    | 十億      | 十億      | 二十億      |
| 不生産階級    | 二十億     | 十億      | 三十億      |
| 不生産階級    | 十億      | 十億      | 二十億      |
| 不生産階級    | 十億      | 十億      | 二十億      |
| 消費合計     | 五十億     | 二十億     | 七十億      |

こゝに注意すべきは「再生産が五十億に等しいといふ事は誤りである。それは表自身によりてすら七十億に等しい。即ち生産者の側に五十億、不生産者の側に二十億」と指摘せるものがあることである。而して又、前記の消費の狀態より考察しても、一ヶ年間に三階級は年々農産物五十億フランと製作品二十億フランとの合計七十億フランを使用消費することを知る。

經濟表の省略化と其範式

然しながら、本年度に於て地主・生産兩階級が購入使用する製作品二十億フランは、其前年度に於て不生産階級に使用消費せられた農産物二十億フランの更新せられたものに外ならぬのである。

斯く三階級は年々七十億フランの財貨を使用消費するも、その消費は年々再生産せらるる農産物五十億フランを以つて永久に維持せらるるものである。故に前記の如くこの再生産額に、賣却せられた製作品二十億フランを加へて再生産總額七十億フランとすれば、前年度の農産物二十億フランは二重に計上せられたこととなる。

五

次に流通に必要な貨幣量に就て觀察するに、經濟表簡式に示めざる農産物五十億フランと製作品二十億フランの賣買過程に必要な貨幣量に就て『經濟表の分析』の本文の説明順序よりして、ケネエが流通の開始前に、地主階級の所得としての二十億フランの貨幣の外に、不生産階級が年投資として「十億（フラン）」の貨幣を金庫に有するといふ事を説明の便宜から假定するものであるとし、この製作品の賣却からでなく、その金庫から自ら流通に投じたところの十億（フラン）の貨幣は「流通過程以前に存在してある元本から流通過程に投じたものであるが」それは流通過程に於て直ちに不生産階級に逆流して來るから、この額を不生産階級が生産階級に貨幣で支拂つたのは「今や無駄であつた様である」と批判せるものゝあることである。

洵に三邊教授が試みられし如く『經濟表の分析』の本文の説明を忠實に表式化すれば、その流通に必要な貨幣量は三十億フランとなるものである。

又ポオドオの『經濟表の解説』に在りては、地主の所得（第一例にては六億、第二例にては十五億）の外に、不生産階級の年投資（第一例にては二億、第二例にては五億）が貨幣であるものとし、この貨幣總額（第一例にては

八億、第二例にては二十億）の内、地主の所得の半額に等しい貨幣（第一例にては三億、第二例にては七億五千萬）は三階級間を完全に循環するも、其所得の半額と不生産階級の年投資に等しい貨幣（第一例にては五億、第二例にては十二億五千萬）は二階級間のみを不完全に循環するものであるとす。（Physiocrates, t. II, p. 866）従つてケネエは經濟表の簡式の流通に三十億フランの貨幣額を必要と做すと考へるは一應無理からぬことであるが『經濟表の分析』の「要約」を注意すればケネエ自身は貨幣二十億フランを以つて、その流通過程を叙述してあることを了解するであらう。バウエルはこの「要約」を表式化して二十億フランの貨幣による流通過程を所謂「バウエルの略表」に示したのである。

元來ケネエは一國所要の貨幣量は農業の純收益額即ち地主階級の所得額に等しき額を以つて足ることを常に主張してゐる。

(i) 先づケネエは經濟表第二版の『經濟表の説明』に於て、不生産階級に所屬する富を計算するに當り「富裕な農業國の鑄貨、又は貨幣は、商業の仲介によつて、其國が不動産から年々取得する純收益（この場合十億五十萬リヴル）」と略々同額であつて、それは十億リヴル（Ibid., p. 11. 岩波文庫『經濟表』二七頁）と記し、更に之に註を附して、「一國に於けるこの（貨幣の）分量は、國內に於ける之が通用高によつて制限され、此の通用高はその國の年々の支出に於ける賣却と購買とによつて定まる。而も此の年々の支出は、同國に於ける年々の所得によつて定まる。故に一國は其所得に比例してのみ鑄貨を有すべき筈であつて、それよりも大なる分量は一國にとつて無

用である。(ibid., p. x. Note : 岩波文庫『經濟表』三二頁註)と述ぶ。

(ii) 又、一七六六年の『農商財政雜誌』に『經濟表の分析』と同時に掲載され、更に論集『フィジオクラシー』にも、それと共に編纂された『重要考察』 Observations importantes の第七考察に於て「一國民に於て、其の貨幣量はこの(生活に必要な財及びこの財そのもの)の再生産に必要な財の)再生産そのものが増加するだけしか増大し得ない」(Physiocratie, t. I. p. 89 : OEuvres, p. 325 : 岩波文庫『經濟表』七〇頁)もので「流通正整に行はれ商業が信用と充分の自由とを以つて行はるゝところの農業國には、地主の收入に等しき所持現金にて十二分であると考へられる」(Physiocratie, t. I. p. 91 : OEuvres, p. 325 : 岩波文庫『經濟表』七一頁)と論じ、更に「一國に於ける貨幣の量は、國民がその年支出に於てなす賣上及び買入によつて規定される、貨幣使用量にて限られてゐる。また國民の年支出は收入によつて規定される。故に一國民はその收入に應じてのみ貨幣を持つべきである。それより多き量は國民には不用である」(Physiocratie, t. I. p. 96 Note 10, OEuvres, p. 327. note II : 岩波文庫『經濟表』七四頁註1)と主張する。

(iii) 經濟表初版の原稿と推定せられるケネエ手記の經濟表に附屬する二十二項の備考 Remarques (巴里の國民文書保管所に現存するミラボオ侯遺文書M七八第一束二三號文書)は經濟表第二版に在りては「スーリー氏王國經濟の抜萃」 Extrait des Economies royales de M. de Sully と題して二十三項となり、經濟表第三版に於て更に一項が追加せられて二十四項となつたが、それは、ミラボオ侯の『經濟表と其解説』の第一篇第七章に「國家繁榮に必

要なる諸條件」 les conditions nécessaires au libre jeu de la machine de prospérité とし考察せられ、更に『農業哲學』第九章の中に「經濟的統治の一般原則」 Maximes générales du Gouvernement économique とし擧げらるゝこととなつた。而もこれはシエルの考證によれば、編纂者デュボンによりて六つの原則が附加せられ一論文としての形體が整へられて論集『フィジオクラシー』に「農業國の經濟的統治の一般原則」 Maximes générales du gouvernement économique d'une royaume agricole と題して輯録せられたのであるが、斯くの如く農業國としての佛蘭西の繁榮状態に於ける經濟的基本的秩序を表式する經濟表の必要條件として、最初記述せられしものより漸次進展して、遂に重農學派の「教理綱要」 Catechisme économique de l'Ecole (Louis de Loménie, Les Mirabeaus, nouvelle études sur la société française au xviii<sup>e</sup> siècle, t. II. p. 312)となつた。この『經濟的統治の一般原則』の原則第十三に就ての註釋中に「かくて農業國民の所得現金額は不動産の純收益即ち年所得にほぼ等しいに過ぎぬ。何故ならば國民の使用はこの割合にて十二分だからである。より大なる貨幣量は國家には毫も有用なる富ではない」(Physiocratie, t. I. p. 149 : OEuvres, p. 149 : OEuvres, p. 348 : 岩波文庫『經濟表』一〇九—一一〇頁)と述べてゐる。故にケネエが一國所要の貨幣量を地主階級の年所得と等額を以つて適當なるものと考察せることは明白である。勿論『經濟表の分析』の註の中に「各階級に移りゆく貨幣額は、毎年同一の流通を再始する貨幣總額の流通によりて各階級へ分配される。この貨幣額は、その全部の大いさに於て、大或は小に、流通の速さに於て大或は小に假定される事ができる。何故ならば貨幣の流通の速度は大いに貨幣の量を補充することができるからである」(Physiocratie, t. I. p. 64. note 5. : OEuvres, p. 315. note 1. : 岩波文庫『經濟表』五五頁註(1))と誌すが故に、ケネエは『經濟表の分析』の本文に於ては「説明の便宜から」其所要貨幣量を三十億フランとし、其要約に在

りては、其流通速度を大にして二十億フランとしたと解せられないことはないが、經濟表の原表並に略表（ミラボオの略表）に示さるゝ流通過程にては、いづれも其の貨幣量は地主階級の所得と等額にて足るものであり、從つて『農業哲學』の基本的秩序の略表の附記に、富として所得の貨幣二千リールを擧げ（*Philosophie rurale*, p. 44, p. 116 : t. I. p. 123, p. 327）又『農業哲學綱要』にては「常に存續する貨幣二千リール」と記述するのである。（*Elements de la philosophie rurale*, p. 51）

從つて經濟表の範式の流通に貨幣三十億フラン（『農業哲學綱要』の略式にては三千リール）を要するものとするれば、山口正太郎博士が指摘せらるゝ如く、經濟表の原表と範式とは其所要の貨幣額の點に於て矛盾せざるを得ないものとなるのである。（『大阪商科大学經濟研究年報』第四號一〇八一—一〇九頁）

此の點に於ても『經濟表の分析』の本文を表式化して、三十億フランの貨幣量を要するものとする解説—三邊、増井及び久保田三博士の解説—にも亦、五十億フランの貨幣あるものと做す越村信三郎教授の解説にも同意し難いのである。

斯くて本稿に在りては、一國所要の貨幣量に就てのケネエの意見及び經濟表の原表並に略表（ミラボオの略表）との聯絡よりして、範式の流通は常に地主階級の所得と等額の貨幣量を以つて説明せらるべきものであると做して『經濟表の分析』の本文の説明順序を変更して、其要約に記述せらるゝ如く二十億フランの貨幣量を以つて其流通過程を解説したのである。

六

更に不生産階級の製作額に就て考ふるに、經濟表第二版の『經濟表の説明』にては製作品の賣却代金を職人は、

地主や小作人と同様に、生産階級と不生産階級に折半に支出するものとする。從つて經濟表の原表並に略表（ミラボオの略表）に就ての本稿の説明に於ては職人は其受け取る貨幣の一半を製作品購入のために同じ不生産階級の他の職人に支出し、又自己の製作品を他の職人に賣却することによりてその貨幣を再び回収し得るものとし、之を本年度の其年投資として留保するものとした。

「然るに『經濟表の分析』の説明に従へば、不生産者は全製作品を地主及び生産者に賣却する。それ故に製作品のほんの少しでも彼等自身の消費の爲めには残らないものゝ如く思考される。範式が「各階級の内部でのみ行はれる一切の流通は除外され」るものとしても、現實に「不生産階級も其製作品を自家用に使用するものである。然るに若し、彼等の製作品が流通によりて全部他の二階級に移轉さるゝならば一體この自家用の製作品はどこに現はれるか」といふ疑惑が生じ得るものである。斯くの如き疑問は『經濟表の分析』の發表當時既に一般に生じたものゝ如く、ボオドオは其『經濟表の解説』に之に就て次の如く答へて居る。

ボオドオは其『經濟表の解説』第三章第十二節に於て、貨幣の介在なきものとして農産物は年投資二（二十億フラン）と原投資十（百億フラン）の維持のための一（十億フラン）との年支出三（三十億フラン）によりて年々五（五十億フラン）再生産せらるゝものと做し、それより三（三十億フラン）は生産階級に年支出の回収として先づ取得されて、其内の二（二十億フラン）は本年度の年投資として生産階級の食料として消費せられ、残り一（十億フラン）は原投資の修復・維持のため不生産階級の製作品一（十億フラン）と物々交換され、この農産物一（十億フラン）は不生産階級にて食料及び製作品の原料として使用消費せらるゝものとする。而して年支出を回収した後に残る純收穫としての農産物二（二十億フラン）は地代として地主階級に納付せられ、其内の一（十億フラン）は地主階級

の食料として消費せられ、残りの一(十億フラン)の農産物は不生産階級の製作品一(十億フラン)と物々交換せられ、この農産物一(十億フラン)は不生産階級にて、食料及び製作品の原料として使用消費せらるゝものと做す。

斯くして不生産階級は、地主・生産兩階級より農産物二(二十億フラン)を製作品二(二十億フラン)との物々交換によりて得るが、其内の農産物一(十億フラン)を食料とし、残りの一(十億フラン)を製作品の原料とするものである。而して不生産階級はこの原料としての農産物一(十億フラン)を三等分して、この三分ノ一を以つて作る製作品を翌年度に、地主階級の所有する農産物一(十億フラン)と交換し、又この三分ノ一を以つて作る製作品を翌年度に、生産階級の所持する農産物一(十億フラン)と交換する。斯くて残る三分ノ一の原料を以つて作る製作品を不生産階級は自己の階級内にて使用するものと做す。

斯くの如くして不生産階級は三分ノ一の原料を加工して、一(十億フラン)の農産物と交換することによりて、三分ノ二の利得を得、結局二階級との交換によりて、三分ノ四の農産物を利得することとなるが、それは、不生産階級がこの賣却する製作品二(二十億フラン)を製作し、販賣する期間中に食料として消費せる農産物一(十億フラン)と自家使用せる製作品の原料としての農産物三分ノ一との回収に止まるものであると論述する。

(Physiocrates, par Daire, t. II. p. 852-854)

今ケネエの經濟表の範式に就て同様に考察すれば、不生産階級は其年投資十億フランを以つて購入せる製作品の原料としての農産物十億フランを三等分し、其三分ノ二、即ち約六億七千萬フランの農産物を使用せる製作品を他の二階級に二十億フランにて賣却することとなる。

斯くて不生産階級は約十三億三千万フランの利益を得ることとなるも、それは結局賣却せる製作品の製造・販賣の期間中に食料として消費せる農産物十億フランと自家使用せる製作品の原料としての約三億三千万フランの費用の回收せられたのに過ぎないものである。従つてそれは「重農主義者はかくの如くして、必然的に重農主義に、即ち賣渡にもとづく利潤に歸着する」ものではなく、飽くまで重農主義的解釋である。

又斯くて不生産階級は地主・生産兩階級と等しく十億フランの價值ある製作品を使用することとなるが、この費用は他の二階級に賣却せる製作品の代金にて回收せらるゝものであるから、この國に於ける製作品の總額はやはり二十億フランである。即ち地主・生産兩階級への製作品賣却代金二十億フランはそれに使用せられた原料としての農産物の代金六億七千万フランと其製造・販賣期間中の不生産階級の費用約十三億三千万フランとの回収せられたるものである。

七

アンリ四世 Henry IV 一六〇四年商務總監ランフェヌス Barthélemy de Lafemas より建議せられたる商工業促進を目的とする重農主義的政策はリシエリウ Richelieu 及びマザラン Mazarin に繼承せられ、更に後者の推舉によりてルキ十四世 Louis XIV の財務總監となるコルベエール Jean Baptiste Colbert に忠實に實行せられて佛蘭西は一應、和蘭並に英國に對抗し得る商工業國となるに成功した。

然しながら、コルベエールの名を以つて呼ばれるこの重農主義的政策に必然的に隨伴せる低穀價策—ケネエは其『人間』論にコルベエールは奢侈品製造業創立のため十年間穀物の價格を低下せしめたと記述してゐるが (Revue D'histoire des Doctrines économiques Sociales, no. I 1908, p. 54)—洵この低穀價策は國民の五分ノ四を占むる

農民を豊年に於て損失に、凶年に在りては飢餓に逐ひ至らしむる結果となつた。

加ふるに、凡ゆる種類の租税と夫役とは事實上彼等農民の双肩に累積せられ、而もそれはアダム・スミス Adam Smith に「最も残忍・冷血なる財政法規」(Wealth of Nations, vol. II, p. 377) と稱せられた請負制度によりて徴收せられたるが故に、この重壓は更に一層彼等に耐へ難きものとなつた。

斯くて佛蘭西國民の大部分はシャトル Châtres 僧正の言を以つてすれば「羊の如く草を食み、蠅の如く飢ゑ」(Higgs "The Physiocrate" p. 9) 其生活はミラボオ侯の比喩を借りれば、徴税請負人といふ猛禽の前に戦々兢兢たる家禽のそれに外ならなかつたのである。(Théorie de l'impôt, p. 105)

而も一方、コルベエルの税制改革も特權階級の壓迫によりて歪曲せられて間接税の擴張に止まり、従つて其大部分は徴收費に奪はれて所期の効果を擧げ得なかつた。數次の外征に要せる巨額の戦費と王の濫費とを憂慮しつゝ、一六八三年コルベエルが死せる後ボンシャルトラン・Pontchartrain カミヤール Camillart 及びディールツツ Desmaretz が其任に當るも支出は増加の一途を辿り凡ゆる窮策が採用せられたるにも拘らず、國庫の収入は支出の四分ノ一にも足らずして國民怨嗟の中に一六一五年財政は全く破産状態に立ち至つた。こゝに於て攝政オルレアン公フィリップ Philippe L'Orléans は財政的鍊金術師ロウ John Law を登傭して、紙幣の發行を以つてこの財政的窮境を押し切らんとした。然るに其畫策の悲惨なる結果は多年の努力によりて建設せられたる佛蘭西の奢侈品製造工業の凡べてを一朝にして潰滅し去つた。而して斯る狂嵐裡に土地財産のみは獨り其價値を維持し、而も其一部は封建的所有者より新興資本階級の手に移りて却つて改善せられつゝあつた。斯くて國家が新たに、より健實なる基礎の上に再建せられなければならぬ時、人々の胸に甦れるは農耕の黄金時代として記憶せらるゝブルボン王朝の祖アンリ四世

の治世であり、其宰相スユリー公の「墾圃と牧場とは國家の乳房なり」との箴言であつた。こゝに於て、當時、佛蘭西の經濟的「大禍根であつた地方「農村の疲弊」と中央「財政の逼迫」とは相關聯するものとなつた。

ヴォルテール Francois Marie Arouet de Voltaire は得意の皮肉を以つて、詩歌・演劇・小説に又道德論に果又神學論に飽きたる佛蘭西人は今やパンに就て論議することゝなつたと述べてゐるが、洵に當時の急迫せる經濟的破局は凡ゆる識者の注意を吸引しつゝあつた。斯くてケネエは「凡べての科學の中最も興味あり、而も最も忘れられたる經濟學は當時強く佛蘭西人の注意を惹くことゝなつた」(一七六五年「農商財政雜誌」十一月號に H 氏の假名を以つて寄稿せられたる "Memoire sur les avantages de l'industrie et du commerce et sur la fécondité de la classe prétendue sterile, par M. H.") と注意してゐる。従つてヴェルサイユ宮殿内の彼の居室に催された所謂「中二階の會合」Réunion de l'entresol に於て屢論議の中心となつたのは祖國の經濟的疾患の根本的治療策に外ならなかつたのである。

ルッソオ、Jean-Jaques Rousseau が『大百科全書』第五卷「經濟學」Economiqne politique の項に論述するは政府の本質、其目的並に職能に關する政治論であつたが、ケネエにとりても經濟學は「社會の統治を構成する學問自體」(Oeuvres, p. 644) であり、ミラボオ侯は之を「國家統治の基本的學問」(L'Ami des hommes, t. VII, p. iiii) であると做す。洵に當時に於て形容詞 Polémique は無意義なるものではなかつたのである。而もケネエ並に其門弟たる重農主義學徒は、當時の自然法なる形而上學的觀念の下に人類に最も有利なる人定法は自然法を示顯すべきもの

となすが故に「國家の繁榮と國民の幸福とを確定する科學」(Philosophie rurale, t. I. p. XXXXVI)たる經濟學は結局「自然の支配」Physiocracyの探究に外ならなかつた。而してケネエとて「社會秩序の自然的法則は、人間の生活資料並に其保存と便宜に必要な財の恒久的再生産の物理的法則自體である」(OEuvres, p. 642)が「他の凡ゆるもの、根源であり、社會形成の根本的的である生活資料に就ての自然的法則を研究し、その命する處を觀察するが經濟學の第一歩である」(Elémens de la Philosophie rurale, p. XIII)が故に、ケネエは先づ『大百科全書』F項の『小作人』に、G項の『穀物』に、佛蘭西の疲弊せる農業の實況を分析し、農産物取引の完全なる自由即ち穀物の輸出が許可せられ、農民に課せられたる課税と夫役とが免除せられて農業が有利となり、それに必要な富と人が引きつけられて、當時僅かに三百萬アルバンの土地に行はれつゝあつた大規模耕作が、佛蘭西の良地三千萬アルバンの全部に實施せられ、更に其並地三千萬アルバンも土地の狀況に従ひて、夫々適當に投資經營せらるるならば、其總収益は十八億一千五百萬リヴルとなり、其時地主の純所得は四億リヴルとなると算定した。(Encyclopédie, t. VII. p. 819; OEuvres, p. 214)斯くてケネエはこの地主の所得の支出によりて恒久的に其再生産が維持せらるべき社會の經濟的基本秩序を創案すべき順序に到達した。而して年餘の苦心の結果描き出されたものが、地主一戸の平均純所得四百リヴルを諸階級の支出の基本とする最初の經濟表である。(Oncken, Geschichte der Nationalökonomie, S. 324-5)岩波文庫「經濟表」三頁)前述せる如く「自然的法則は社會を構成し、かゝる法が命する秩序に従ふ人々の欲望に必要な財貨の絶えざる再生産と分配のために自然の創造者によりて作られたる永久不變のものであり」(OEuvres, p. 637)而も「この法則によりて萬物は、生産物は、富は、其存續を維持し、更に其可及的の最大量にまで増加し、さへもするものである」(OEuvres, p. 441)が、經濟表「この」神

の命令の不滅の實行を、正確に、而も極めて簡單なる計算にまで還元する爲に發明せられたる算術公式である。」「(Philosophie rurale, t. I. préface p. xi) 元來「計算は經濟學に在りては、恰も人體に於ける骨格に比す可きものであり」(Philosophie rurale, t. I. préface p. xlii)「吾々は計算に據らずして經濟を説くは不可能であり、……一家の家政が其財産管理人より計算によりて報告せらるゝ如く、一國に在りても、所得と其諸支出とは計算せらる可きであると主張せらるゝは正しく、經濟表の著者が氣ついたるは實は「その」である。」「(Philosophie rurale, t. I. p. 118-119)の意味に於て、經濟表第二版の一冊をミラボオ侯に贈るに際してケネエは自ら之を「家政の本」Livre du Ménage と呼んでゐるのである。(Economie Journal, vol. V. p. 20-21; Schelle, le Docteur Quesnay, p. 390-6)

門人ル・トロヌ Le Trosne は「測定し得べき物體を研究對象とする經濟學は精密科學であり、それは計算に依りて吟味され得る。從來斯學に於いて缺けしものは、推論の支柱として役立つ、且つ其目的に使用され得る便利な公式であつた。然し今や吾人は、斯の如き公式も經濟表に於いて有することゝなつた」(De l'ordre social Discours, VIII. p. 218)と記述するが、洵にケネエに至るまで經濟學は「歸納法によりてのみ推論し得るに過ぎざる推測科學 Science conjecturale であつたが、經濟表の公式の天才的發明以來、該科學は精密科學 Science exacte となり、其一切の問題は幾何學並に代數學の問題と等しき嚴正にして不可抗的證明を受くるに至つた」(OEuvres, p. 442)のである。

故にデューボンはその『摘要録』に「外國の諸著述家の中、何人も今日迄、道德並に政治の諸原則全體を知悉することなく、何人も亦、これを精密科學となすことがなかつたのは眞實である。この名譽は、佛蘭西人に、吾々の師に

殘し置かれてあつたのである」(OEuvres, p. 716. note 1) と記す。

斯くの如く、經濟表は「經濟學の最も複雑なる凡百の場合に於ける一切の問題を綜合し、之を解決せんがために創案せられたる計算の公式である」(Philosophie rurale, t. I. Préface p. XLV) が、この「算術公式たる經濟表によりて富の分配・流通並に再生産が善きにあれ、悪しきにあれ、蒙り得る種々なる變調の結果は極めて迅速に、極めて正確に、且つ極めて確實に算出し得」而も「統治の如何なる運用も富に影響を及ぼすことなくして行ひ得ざるが故に、經濟表はそれ等が人類・社會並に其社會を構成する諸階級の上に惹起すべき利益或は損失を正しく計量しそれに基づいて其凡べての運用の價值を極めて正確に測定する極めて迅速にして明晰なる手段を供するものである。」(OEuvres, p. 155) 故にケネエは、「裝飾の奢侈」の害を、「穀物輸出の自由による穀價騰貴」の利を、更に又「間接税徴收」の弊を經濟表に依りて計數的に算出し、其提唱する農業投資の重要性と、穀物輸出許可並に土地收益單一課税制の効果を立證したのである。洵にケネエ並に其重農主義經濟學徒は穀物の自由輸出と土地收益單一課税制とによりて佛蘭西の農業は最高限度にまで發達し得るものと做したのであるが、單純なる自由貿易論は彼等の專賣に非ずして當時の有力なる輿論の一で部あり(高橋誠一郎教授「フキジオクラット」純收益論に就きて—『三田學會雜誌』第十一卷第三號三四頁参照)又、單一課税論も必しも彼等の獨占物でなく税制改革上の一つの提案として多分にジャアナリステイックの意味を持つてゐたもので(島恭彦氏著『近世租税思想史』三〇二頁参照)この二つの提案が純收益説を基礎として主張せられ、當時の自然法の觀念の下に自然的秩序として説述せられ、而もそれが經濟表に表明せられて初めて重農主義經濟學説として成立せるものである。斯くして、シエル博士の言の如く經濟表は重農主義經濟學派の旗標となつたのである。(Quesnay et le Tableau Economique—Revue d'Économie

Politique, 1905 p. 520 Le Docteur Quesnay, p. 294) 故にミラボオ侯は巴里の自邸に一七六七年の九月より開催せられたる最初の經濟學講座の開始に當りて「經濟學は生活資料の諸源泉と、其増産に從つて増加する人口の研究である」と定義し「該科學の諸原理を確立し、其結果の説明を容易ならしめんが爲に社會の秩序並に其生活資料分配の秩序は經濟表と呼ぶる、數字と圖形とによりて構成せらるる、一公式に表明せられた」と做し、其講座の初級第一課は經濟表それ自體の理解、第二課は經濟表の使用練習、第三課は經濟表を利用して諸經濟問題を解決するに在ると講演す。(Wentse-les Manuscrits, p. 96 : Le Mouvement, t. I. p. 134) 洵に經濟表は國家統治の基本的學問である經濟學の「第極」le plus ultra (L'Ami des Hommes, t. V. p. iv) であり、其「要略であり、其基礎であり國家統治の羅針盤」(Philosophie rurale, p. i : t. I. p. iii) であり、從つてそれは爾後「社會の守護神」Palladium des Sociétés (Éléments de la Philosophie rurale—Discours préliminaire, p. 99) となるべきものであったが、不幸にも、ガルニエ Joseph Garnier が述ぶる如く「奇妙に排置せられたる數字によりて構成せられたる」の表は、その學說の上に光明を與へしよりも寧ろ不信用を蒙らしむべく貢獻した」(Dictionnaire l'Économie Politique, Paris, 1853. t.II, p. 190) の感があり「重農學派によりて一つの謎として殘されたる經濟表はその後の經濟學の批評家や史家もこれには齒がたらず、一國の富全體の生産及び流通に關するフイジオクラットの見解を一目瞭然たらしめた此の經濟表も依然後世の經濟學界にとつては充分ドンヨリしたものであつた」のである。

從來一般に經濟表は、原表と略表(本稿の範式)との二種あるものとせられ、而も兩者は其記入する數字から、又點線にて示めざる、機構から別個のものと考えられ、就中、山口正太郎博士は「全體上の上から此の兩者を矛盾なく其形式に於ても、内容に於ても、果又數字の上にも、統一することは不可能である」(『大阪商科大学經濟研

究年報』第四號一一頁)とさへせられたのであるが、地主階級の所得二千リーヴルを基本とする經濟表の原表と略表を『農業哲學』に、又原表と略式(『經濟表の分析』の範式と同一機構のもの)とを『農業哲學綱要』に挿入、記載し居る點よりしても、ケネエ並にミラボオ侯に在りては、其等は相互に何等矛盾するものに非ざることとは明白である。故に前稿(『經濟表の生成發展』、『三田學會雜誌』第三十八卷第二號)にて、佛蘭西の農業再建後の經濟的基本秩序を表示する經濟表諸表間の數字の關係を闡明にし、次いで本稿に於て『農業哲學』記載の略表を採り上げて經濟表の原表、略表及び範式の三種の機構の關係を明瞭ならしめた。

斯く數字と機構の兩方面より經濟表を發展的に考察し、且つ地主の所得四百リーヴルを基本とする最初の經濟表の數字の論據を『穀物』論に算定する佛蘭西の農業再建状態に結びつけることに依りて、經濟表の意義を多少とも鮮明にせんと試みたのである。

佛蘭西に於ける重農學派研究の權威シエル博士は「經濟表の如何なる版本も讀者を満足せしむるものでなく、……經濟表は最も晦澁なるものに屬する。然しながら吾人は今、之が新たなる解説を企圖するものではない。蓋し、ケネエも、ミラボオ侯も、果又、ポオドオも盡く失敗せる處を敢て試みんとするは冒險に過ぎざらん」(Revue d'Economie Politique, 1905 p. 508)と做して、其著『ケネエ博士』Le Docteur Quesnay, Chirurgien Medecin de Madame de Pompadour et Louis XV, Physiocrate, 1907 にも經濟表そのものゝ解釋には觸れることがなかつた。洵に増井幸雄博士の述べられた如く、ケネエの『經濟表の説明』又は『經濟表の分析』は可なり難解であつて、『ケネエ』(一四八頁)經濟表第二版本を最初に邦譯せられたる松崎藏之助博士は著者ケネエが「幽思熟慮の結果遂に發明せる奇想卓見を僅に文章に現はせしに過ぎざるを以て、今より之を見れば平凡の中猶晦澁過ぎざる所なきにあらず、余の淺學不文を以て之を説述するは恰も蟻螂の斧龍車に當るの非を免れざる」(經濟

志叢第一篇『經濟大觀』明治三十五年九月發行一序文二頁)ものとせられたのである。

素より淺學非才の上、讀書の力も、時も、有すること極めて少なき吾々の能くする處に非ざるは論を俟たないが、自主自衛體の確立が、現實に國家の隆替を決する鍵となれる現決戦下、食糧を、原料を、更に又、肉體的にも、精神的にも強健なる人間を供給する農業の重要性は、國民の凡べてに其日々の生活面に於て痛感せられつゝある今、經濟學の父スミス Adam Smith によりて「農業體制」と呼ばれた佛蘭西のフィソクラアの所論を綜合的に表示して、其旗標となれる經濟表に就て小論を草して大方の御垂範を冀ふこととする。